

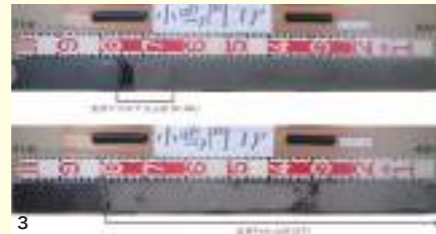
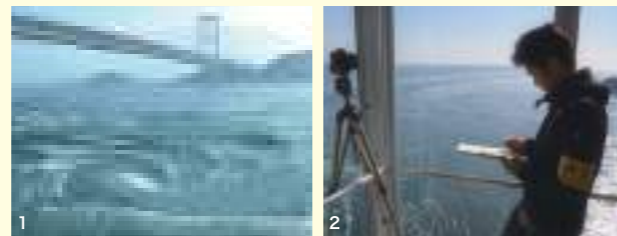
ユネスコ世界遺産登録に向けた学術支援 地域資源の価値の根拠を、 ひとつひとつ明らかにする

■兵庫・徳島「鳴門の渦潮」世界遺産登録

兵庫県と徳島県は2014年度に兵庫・徳島「鳴門の渦潮」世界遺産登録推進協議会を設立し、鳴門海峡の渦潮を世界遺産に登録すべく準備を始めました。兵庫県は自然分野の学術調査を担い、類まれな自然美・美的価値と、重要な地形学的・自然地理学的な価値の2つに絞って調査を進めています。具体的な調査として、渦潮や海峡を眺望する視点場からの景観の特性やその歴史的な変遷、また、深度63mに達するボーリングコアの採取・分析による鳴門海峡の成立経緯の解明を行っています。登録申請までは長い道のりですが、これからも鳴門海峡の渦潮が有する普遍的価値をひとつひとつ実証する調査を、根気よく進めていきます。

■奄美・琉球四島・地域の世界自然遺産登録

2011年、新たに南西諸島を世界自然遺産に推薦する方針が政府によって決定されました。これを受け2013年には、太田英利主任研究員ら南西諸島の生物や自然環境の研究や保全に関わっていた研究者や教育者、環境省・



1. 大鳴門橋と鳴門海峡の渦潮
2. 渦潮の景観調査の様子
3. 2020年度に小鳴門海峡で採取した63m長のボーリングコア(火山灰を含む部分)

林野庁のOBなどが委員となって、世界自然遺産候補地科学委員会が立ち上げられました。7回目の委員会でまとめられた案がユネスコに提出されましたが、先方の諮問組織である国際自然保護連合(IUCN)から内容に改善の余地があるとの指摘を受けて、登録はいったん保留とされました。そのため委員会では遺産価値の根拠を奄美・琉球四島・地域に生息する固有種の豊富さに絞るなどした改訂案を作成し、2021年1月に再提出したところ、同年7月にユネスコの委員会によって、世界自然遺産のリストへの登録が決定されました。

民間企業の生物多様性に関する取り組みの支援 継続的な取り組みを支え続ける

近年、国内の民間企業の生物多様性への取り組み意識はますます高まっています。これは2010年の生物多様性条約締約国会議(COP10、日本で開催)において、民間企業がビジネスの中で生物多様性の保全と持続可能な利用の実現に取り組むことが不可欠と指摘されたことを契機に広がりました。加えて、2015年に国連サミットで採択されたSDGs(持続可能な開発目標)の中で「あらゆる場面で、あらゆる立場の人々が持続可能性を念頭に活動することが必要」と示されたことで、その流れが加速化しました。

当館では、ひょうごの自然・環境を未来に継承するためには企業の生物多様性の取り組みの質の向上が欠かせないとの考えから、開館以来、専門的な立場から様々な支援を行っています。

主な事例には、長期にわたるものとして、大阪ガス(株)姫路製造所における生物多様性に配慮した緑地の創出と維持、ミツカンよかわバイオトープ((株) Mizkan 三木工場)における市民・企業・行政による環境保全・環境学習の協働のコーディネートが挙げられます。近年では、(株)竹中工務店



1. 大阪ガス(株)姫路製造所における西播磨地域産の多様な植物を育む緑地 2. ミツカンよかわバイオトープでの地域と連携した環境学習の取り組み 3. 竹中工務店における生物多様性研修の様子 4. エスペック(株)神戸R&Dセンター新社屋上での地域性種苗による緑化

の生物多様性促進プログラムにおける社員研修の企画・運営や研修所敷地内での里山保全の支援、エスペック(株)神戸R&Dセンター新社屋における地域性種苗を用いた生物多様性に配慮した屋上緑化への種苗提供および技術的支援などがあります。

当館は30年間の企業支援の経験と研究員の調査・研究を通じて培い続ける高い専門性をもとに、引き続き民間企業の生物多様性の取り組みを支援してまいります。

生物多様性保全に取り組む市民団体の活動支援

ひょうご五国の多様な自然環境を守り、 継承する

兵庫県の県土は他県と比べ東西南北に広く、気候も地形も変化に富んだ環境を有していることから豊かな生物多様性が育まれています。しかし、開発による生態系の改変、里山里海での管理放棄、外来生物の侵入などの様々な原因により、ひょうごの生物多様性は失われつつあります。

この問題を解決するため、兵庫県の各地で生物多様性保全に取り組む市民団体が活躍しています。当館はこのような市民団体からの様々な相談を受け、活動方針などの助言のほか、保全活動地での生物調査への協力、調査方法や保全方法の講習、保全活動団体同士の交流の場づくりなど、様々な支援を行っています。

具体的には、里山保全については開館当時から蓄積したノウハウを活用し、北摂地域を中心として様々な団体の活動を継続的に支援しています。近年は三田市と里山担い手養成講座を共催し、その修了生により結成されたブイブイの森クラブの活動を支援しています。河川や湿地の保全では、豊岡や武庫川などを中心に、市民団体の支援に加え、行政や



1. ブイブイの森における里山担い手養成講座の実施 2. 武庫川における小さな自然再生の取り組み 3. 淡路島におけるハマアザミの保全

様々な団体との連携の促進に取り組んでいます。また但馬地域での絶滅危惧植物の保全活動の支援として、それらの種子保存や植物の栽培・増殖を実施しています。このほか、兵庫県植物誌研究会の淡路島でのハマアザミの保全、多紀連山のクリンソウを守る会の篠山でのクリンソウの保全などに対して、モニタリングやデータ解析の協力を行っています。

ニュータウン再生に向けた取り組み

プレイヤーとして、専門家として—— フラワータウンのにぎわいづくりに 寄与する

ひとはくは、「フラワータウン」というニュータウンの中心に立地しています。フラワータウンのまちびらきは1982年です。2022年でちょうど40周年を迎えることとなります。日本全国で少子高齢化が進むなか、フラワータウンにおいても、今後、持続的ににぎわいのあるまちをつくらせていくための動きが進んでいます。

2021年度に三田市は、フラワータウンの活性化について、地域住民や周辺の事業者、関係行政機関などが話し合う「フラワータウン再生推進協議会」を立ち上げました。ここにひとはくも参加し、フラワータウンのひとつの重要なステークホルダーという立場だけでなく、まちづくりに関する専門の見地から、三田市や地域住民、事業者による様々な活動をサポートしています。2021年度には、ひとはく前の複合商業施設「フローラ88」に買い物に来た住民とまちの未来を語り合う「まちかど談話」、市民センターの来訪者が自由にまちの将来像を描く「まちかど伝言板」を実施しまし



1. フラワータウンの景観 2. 買い物客とまちの今後について自由に対話する「まちかど談話」 3. フラワータウン市民センターに設置した「まちかど伝言板」 4. 農村地域と隣接するフラワータウン

た。大切なのは、フラワータウンの多様な価値や資源を発見し、それらを共有し、地域づくりに活かしていくことです。ひとはくは、「ここで生まれ育った人が帰ってきたくなるまち」、つまり「ふるさと」としてのフラワータウンをつくることに貢献していきます。